追善
六々乃春　完

911.3
ツ

東中

むかしの人のいひ置し樹をうへけんとおもふ事
まことに風雅にしても秘事にして今の学者
くちつたへしハ先人の三周の事ハ近喜
俳諧のいとなみせんと思ふ事津にも学
るひとく学びて出世先送り稿乃
ある所の書ともに手深の秘事なり
出もろ千年見ても秘伝と云けるとぞ

於是月雲彼(?)に遊ひて俳句を
翠(?)紫(?)とよむ志を顕せる事業(?)四運
廿一甲子(?)既に経る初丑(?)の日(?)より
先人の遺(?)跡をたつね(?)しより此四の
桃紙(?)発句に題してこの恭(?)くはなし
好もの(?)と主此國に芳(?)名達る事(?)れる事(?)ども
毛(?)に先人の趣(?)も然(?)るを編(?)とも望む
事(?)は四季乃國の先(?)哲(?)の味を知(?)る海(?)
子とは称(?)る々の俳句稿(?)中社(?)中より
伝う(?)孫(?)引(?)の子孫(?)新(?)世(?)の引(?)きを光(?)
人のみ(?)ものぞ(?)みし好人(?)とよ(?)る

寶暦己卯十一月

陶々園(?)芸葉(?)誌

辞世

身は雲もはらひきよ
以る道の時に霧もなん
いつとても悲しき事そなき一世これ
飛りしての道て哭せしとをし
春まちてり花のことの明け
出かけし

寛保四年甲子春之
菊之園
亀丘

病中吟
老君のらく
高き葉の花哉
雷朶哉

いつれを菓子に名月
重ねぬ中も
さかなの目見しに
ことし

月

古は出るを待つて見哉　八至

名柳も袖も寒さの露　茶菊

川留に榾の志ふけもふけて　巴雪

おのさくきら傍ヶ世やら　錦夕

嫁入は格子の物の出来不出来　野水

拝つて於能の風姿　松夫

雪

忽ちにまきれし年こしの山　松夫

いつ迄もあかき庵の嵐　茶菊

日やうにあらしの雪か世に寒て　埜水

今朝のしら露ねかの飯粒　巴雪

酔さめし心思ひ出と忘れて花の雪　錦夕

雉子も蛙も草に生まる　八至

花

目に未ぬ雲ハいつとなの暮　野水

しら雲おはしまに古き初かゝり　茶菊

喜ら来て東和に都の雲を磨　錦夕

千石取此庭にかゝる春　松夫

めつらしき花につく猶さみしき哉　巴雪

扇の出筆乃文憎しかな　八至

亡父のまきのてまへか
みなやさしおもかけも
枕のみてしおきて

ほとゝきす今も呈様此鳴ちと　茶菊

杜丹ようつれいろし乃雲　八至

唖口る茶屋の真さ至の呈性て　松夫

おゝ保えゐ子の野移てきる　野水

きりうけ乃、秋ちさ月ちらんら心　巴雪

稲城の風て肥わやゝや　錦メ

# 怪

ちりかゝる世にうきしかりきと
ちる人の言葉を
思ひ出られて　麦浪

霜はれや石にちる木の葉果いあり

朧月ゟ名山も名なき峯　如之

中々水も秋の装ひぬれきて　素道

借着をとられやうに脱きり　寸童

琴の音も二階にゆかし雲の上　畔古

後て知らしれ宿のちりつき　為浄

桜

竹杖のあとなつかしや山さくら　古遊

咲もまくやもやきやし盃　槫良

雪隠の軒に春をおろもて　波友

大きな茶碗を筆一本　愚養

何所へ往て穴を捨ん後の月　素聞

瓢の形乃まで流しけり　梅雫

さ久良

ゆらす梢に人の起して桜の雨　何声

かゝ春三いは晴て夕咲ぬ月　雨圭

傳化してうけ葉をむり物語　和節

女房しと祖父がいまな宗　青湖

後れ者のせらて生餘る笈の内　路考

つまくるゝ思ひく牛あり　二曲

## ほとゝきす

待れしハ道引ちからぬほとゝきす　已蝶

月のこゝろちうきしゆゑ花の月　茶什

夜乃訳をきゝぬ寞ふみたさくて　木吾

こゑのまさらんと碕ニ集まれ　五松

今の世ニ三疋猿をも称出さ花　素向

国あらしくても山ハちかつき　蝶野

## 杜鵑

脱きそこ布衣の絲やほとゝきす　兎波

不々き枝れにのみ弁を結　如竹

讃種可天狗乃葉も動りて　兎由

人珍しく留さりまける　鶏士

満ゝし此月ふさうなの入えまけ　笑可

さ九ころ杭葉に二度の毛遣　筆

杜宇

保とゝきす肝に満てや半夜丸　標郎

軒の雫も白ふ袖のしらぬ　杜十

酒もりの菓を菓かねて集りて　曽丸

名越付てるゝ献上の名　左柳

八月も二日の月も常よりも　蘿女

きぬさしてり京静や　可條

よき朋をとらしやらゝ
名伯あり〳〵ふる事も
黒やり傳

さく梅之迹筆は柳うまく木の月　温故

常のつて梅ふ色に水をと　加濃

ちり鳴の柳は秋乃まくさに有　菊茂

家うちのそのゝ家好に飽　桂之

出ゝふてゝ家ようゝ腹の鱼ゝ中ね菜　詮史

風もなのし唐の入あ年　其夕

月

静寂て延きくむし露月柱　可梁
眠ませしらす霧仕廻ふ草　東平
帆の気あり寒うしき冬ちかよりて　百拘
留守敷れぬ時ふ来ぬ者　座翠
てうちんに日もなは世間も年の暮　淡夫
明かり買ふて名を削る影物　操之

風韻の先達を　うしなひて

月ふ拝んこまんの月のちり残か　淨石
思ひ出す人の面影身を比　一至
酴醿瀬戸大きさふ蝶まえうて　旨吾
仲まる兎の影ふ一とんな　東壺
世のうちをもしらぬ借家ふ琴の音　南河
海ろかききらんろ鯱のふとけ　査岸

## 雪

初雪やこほれ残し種ハちりちり　和銓

雪衣乃香のぬけて淋しさ　雲甫

条乃ハちらり積え馬の肥て来て　亦翠

店屋の玉子ヶ作ハやらぬ　戸聳

振舞に酒氣とらんせうも後の月　文水

風もなくなく荻てき乃庭　其口

## 雪

硯乃墨に届きかゝりや松の雪　素聞

水の中に出来鴨の道筋　波友

足ふみても雪に篝を照して　可卜

砂糖の数も家に嫁ひ也　里卄

十六夜も更に留守なる燈し　奇峯

霙の上ツ葉のまゝし　竹賀

雪

手のうちに覚えもちらで雪丸げ　入楚

かくれて咲る室の水仙　味調

紅梅を角々に障子ふさぐ中に　律古

身此月る十三夜に照　含丸

志ふ柿ハ可愛らしきを名付て　園李

すきの屋松の風にふかるる　鼠友

山ハ万仞にそびえ雪ふる千尺に
かゝる此宗匠の佳名ハ後世の
末まで不易にて語り継ぎるし
さ程にすぎ此楷の花を詠し
秋の室の月に吟し蕉風の
万言に率然悦しめしも
今空心をといふさむしとに
ちぶ判ぬ

雪

山の名の消ずに高し雪の果　哥清

本覚を峠て雉子の大音　巴音

永日をひる暮のあとさきうつる　复青

月

似る人の顔さへ見えず無月　旻青

雖志つまれ語もみゝなと　哥

皆つちみ枯て橋本に自慢して　巴

花

短冊乃一きれ寒の手栖ぐ　巴青

海まくいはの浪く青雲　旻

万よ季も朱に条気のうらみて　哥

雪

雲に採く中也きさんらく谷の底　湖南 雲裡

飛だり見のく青空於夕月　文素

末とのたる川乃ゆきみにおよの熱ら　可風

きぬの店やれ二歳ちくへや　雲

初雪て鏡くて路地いゆうちり　文

賀まま初くの年のせんさく　可

雪

古志かる人やかへり行て雪の中　加ゝ小松 野冬

此時冬の姿をさとりし　中倚

宋乃戸も舟もあきしめる枝の明て　正次

茶乃焚ありといつも流れある　松井

日まて吹とあつしる有源し　尼 素園

牛乃一里の長さおほえる　桃李

花

吉野山はさくの木まで花なれど　浪花 鳥酔

笠着てみえ舟の人も咲あり　魯郷

桜はまこと花しも黒く仲足らる　馬明

花さくこの内がたぞひまなし　長眉

後の月雲のまぎれ此枝傍きる　寸馬

四所ろ吹て柳四五枚　巨峅

嘉石

鶯かきりの声をほしむ春　加々小松　是由

笠に鳴れみし夜のくれ　ト林

須山から連れし子をたちけり　竹至

手柄にくらべて嫉情しき蝦　波睡

水仙を禁ずるたびとて里子ちの季　汀曲

去くしは風を休む老鶯　楓谷

夏

さくらちりて柳に花と成にけり　東武　涼袋

雨持つゝくもる春の三日そ　輕素

やし蝶の出る羽へ出代早さ　冠子

瓜ちり櫻さ見てのこしろに　李北

まさ目にはよふ子のつれゝ綿て春　烏朴

風ひゞきて春麦のそよ枯　女　志ちん

杜宇

二声て鹿成してや侭しまぬ　松坂 呉扇

淀ちと枕てみしの夜のふ旅　魚吹

履摺もゆりうちあしね綴かく　貫山

麻都の手出ちて孫を古や　金蝠

菊たくこの床にねろふ羞の月　梅琴

鳩窓ちかれまる浜秋まくら　青蒲

保登々幾須

二つとは聲ねおちきや都しさか　東武鳴々葉 柳儿

祝盃はまろし雪のあふ乃色　秋石

夏さかは草雑ハ葉の人に似く　亀凌

箸のきれんを母ろく祈みより　素有

清く香をおとしハ丸く出る那　汀鳥

袷乃袖秋あしむ夜んくん　帷山

雪

阿野津 二日坊
ゆふ暮は其ゝ比や二の雪丸け

揘馬
梅か香まて雨水と雪の朝

菱波
鶴の子の梅をとをうめし夕

民古
おもしはをとふて見れ雪

咄秋
夢し茶を用ひ夜着の新世界

筆
とうくちゆくしおもね夜寝ひ



月

名古屋 也有
櫻科や花れとも星出ふのゝく

八亀
出るゆくちるもみちの戸の露

木児
きく翁ハ米おもしの秋の夕れ色く

野亮
せんつりふてハ拾ハ出来む七

路十
人は出しとをも雨れ夜ぬとも経

利推
いも月とも来て加しこまりより

雷

あら鳴や思ひもよらぬ椎の音　松坂 素童

鐘はわれと自に寒き梅　鳥仙

手巫に二幅筵をとおさせて　麥州

吹出も雷は早音なり　左凌

下り目子ち忍と惊く休きり哉　可人

なおもう秋をまとつれる唇　修古

雪

かゝき静に雪やかゝみの下地窓　松坂 孤舟

聊ゆる紙子新く称名　笑山

打先も雪道の跡を添て　芭人

風おさまれた里余舟　之童

熊の音比 縁さへ細き月の弓　一膽

霰降ゝ泉て上に江子の鶴　陶童

ゆくは老屋の世をしと
思ひ出く出はしさひの
た揺留をさらされと
伊勢相梅庵主中

志らふ（き）影は来ぬ月見哉　兎夕

草ふ寄さく屋の近道　巴十

白雨も秋北蝉の中白たもる　寒匝

たれ出ちつる雨の出むしかず　枝放

者めけさうなの空さん京都も　兎秋

扨り所の名も又涼しき　味雪



徒然十七文字は椿洞の
世間観相ありて
是?子出しき　義上

蓬宿も若手まちや山さくら
綾をと乗のむさ細ひるの暮　椿洞

着よこし隠の主つゝ子春来て　上

米たり蛍は二衣ね子ほとゝぎす　洞

制札も月根も書の男と出　〃

郷給やうし出て麻乃雨傘　洞

ウ
咲かけてさくやく花のさかなへし　上
ことのまゝ作る鶴の妙案　洞
祖父さまハ大種子昔に顔をして　山
いつまても上手にふて貴さり　川
辰年より吉例の達の京あふして　上
四五十歯好くきまに学問　川
町人ハ六歳ても今ハ二階堂　上
娘子まきつらせて志んらみ　川

貢まつ此使も文のちらし書　上
義をつくしゝ溜息ハ報の孫　洞
此月見の薄のさかりまかて　上
稲荷社ハまひやよ花鞍の　川
金銀を蔵へして蝶の飛出行　山
薮時さへ氣をもし親子たる在　川
菊さかし野しろの上乃才遣ひ　上
ともれ清水を汲て河作結　洞

春ノ部

麦浪連中

豊出雲山をのそ柴や連なる　如之

大文字のあとをとめけりつくし　菊茂

きとの葉りつ花や残してきゆる雪　曽呂

水つといてしはふの白氣哉　茶城

光悦は仲も京まつを風巾　畔古

僧 芦帆　蓑もて硯のくみも汐干かな

雪の歯と菜もあらきれ摘有　麦推

君が代の世に成りてこそ霞かな　寸重

かゝる世も皆人ごゝろも百千鳥　有雪

ふくらみて摘るまもしるし梅の角　為洋

曾人も山人え出る膝の間かれ　程夫

梅さくや香の煙ハまつまとも　玄歩

萩乃根のわか葉や風さへよわる比　恕九

春の花よりもめつらしき梅ハ　祐古

山吹のむらはえしけみ鶯ありさん踏　戯古

春雨やあまり海のかし此座所　里圭

梅さいて性の泥沼も白ひかり　秋巴

山ぶきも人白ひきをそけん先の花　和棠

年しらす香ひさきまつや梅の色　羅二

其ぬれハ雨ならても梅の角　松雪

花守ハ花よ人おちつくや継つ　素道

水音舎連中

萩きえて桃乃くれゆくきのかけ　路考

一時雨を磯伏たるみなから　由圭

月花の價の知れる梅の花　二曲

寒風を顔をまもらるゝさくら哉　青湖

ちり候ちるとみゆるさくら郎哉　味葎

旧知れぬ名ほして松乃さくら哉　左蝶

雖月連中

山里のしむつき頭ける梅の鶯　波女

此ふに親て大鶴中北浮平かな　素聞

田廻しやまを洗ふまもちまけた人　錦夕

海棠や残ても初ゝ嫁の月　巴雪

青空に一目ハ走て梅の鶯　乃卜

梅ちる先相をとくちりうら花盛　撰者 吾表

何とかきり伊勢ハ佐ゝれ梅の花　梅雲

送人ハおもしろけなきさくら哉　寿峰

帽子落く海老の語ふむし一ほなし　埜丸

浮雲のふ山のたつれのきさぬ哉　菜菊

きさらぎまて菓子耳もちは梅の花　樗良

酔ふたる人形のかく花に浮て来る　杉丈

春之部

ひなの宗子歌の世つりやさかりかな　蝶奴

雨経のちきれして生海苔に　路風

桑の葉残る水に去る花の下　八兕

甲縁りし垣のその奇や縁月　兎絲

山ふきや笠のしなら腰に替の川　古挺

凧つかる子笑て山さかりかな　里朴

春目利了如けてれや風了様　呉雪

ちり初や月日の足を止して春　巨十

青と河ん幕れあらしハ笑乃猫　排雲

夏之部

松堂連中

ほとときす去ちりし跡の音も宗　木吾

よの音ハおとろこてされを初ききす　素向

夜るハ梅了かてり松藤や杜鵑　五松

十六

あら時々雲たちけり七夕とも哉　桃里

去年よりの石にしみけり水子紋　蜨野

末のけふ旅に雲や結しまつり　待我

郭公古き田もありて杉木立　示朴

如月の首丸家一羽ありて風すゞし　茶什

罡本連中

おもしろき雲掃よせて夕まつみ　笑可

両家哉ちりあへる浮世木に　鶏士

村寿の梯の下より又出る星の花　邑由

二井寺の如く北露や千蔵の旅　如竹

清水寺上戸も居る星の雨　茶菊

妙見町連中

坊ありしいつ積ける真て蘇子坊主　杜什

夕暮の花の萩や域も北下まの　羅父

紀の海の浦頭より星可哉　左柳

ちりしとも我ほと似びる峯かな　求翠

松風も晴ゆんとしくも虎哉　雨香

晨日や葉末にしぬ水のおと　可條

おもむきも碑の苔なん 時鳥　曾十

やれ伏葉偏みてゐる波のおと　曽丸

夏の部

杜若滝に出る鶯かな　李童

闇ながら撫子も深き哉　莚耳

打寄る北高くまかしき切きれす　其傾

宿一つ余所に出ても花の春　藻波

雨ふりて橙の花の東郭公　青布

子規只此口の明くまゝし　青波

五月雨や都のあかをゆすりん　邑舩

今朝乃雲の葉のしほるほみ　染之

秋の部　神風館連中

葉月哉や杉にしくまさりの糸脈　菊茂

いなつまやりつゝのなよき庵の外　詮士

咲よせる風はなしむ花火の跡　加濃

杖の目露にて秋ふる野路かな　其夕

鶏頭やおとし七の酒上戸　桂之

桐蓋連中

菊に手まて雨ひとり菊の雨　東平

見し乃霧晴て草の花　梨童

雨よりもうちのやかて鶯かな　百柯

花も紫やあふいかなき姉の声　哩翠

実の生ぬまゝも風に落る　操之

月毎や水なあれてふ秋　淡夫

斬鮫斉連中

打揃や書の手すみかな　南河

おもしろう人すまぬ木槿かな　省吾

かく秀たりとくくしもの声　査岸

水あけて袋に並ぶ花の雨　一至

秋の名や是て宜しく杖の風　東壺

待兼て跳て宜西風哉　浮石

秋附録

白露の名は満る月見の懐紙哉　白毛

風情に告白きやし今朝の霧　倭客

月取る池を詠ませてやり水　李江

宵てるらし絵糖見ぬ七夕　茶菊

取分て狩衣ぞ望今日の月　素川

氷月や雨ふくも又哀し　百童

冬之部

妙見早連中

青田より振けて雲見舞　文水

起しきて又蹴ちらす子猫可笛　其口

初雪の鳥の寒や一雲残る　戸笙

古雛手摺の笛数独つ那　雲車

冬附録

言の葉は霜にも枯ぬかしこさ　梛如

千年より李一もと見へ枯野哉　　排雲

浮世とて古草譲や冬の設　　東里

枯尾花や年貢ハつもれとも　　湖岸

こゝろしや春のして来る前の年　　一壷

臘八や伯父か坊にもちか俵　　湖舟

人声も鳩の出来るかれ野哉　　甘秀

京を出て寺ゝ海続ぶる菩薩の礼　　芭船

家の鶴や出世の望日暮かな　　宇治　起口

積る物も随ハあり雪の暮　　草浦

ちらりゝと気賀や夜明の色と　　梅丈

梅の花咲出して梅の寒みぞ　　涼花

粒々舎連中

晴て行しぐれの跡や冬椿　　律古

寿ハ二人も如月の十夜哉　　園李

臘八や山出あるハまた柊の季　　和調

歩行く手て何の理屈も寺の鐘　　金丸

ちくて風薫せとすに杜かな　嵐友
やみの夜りさと白き躑躅かき　文史
そよ空鉢のまへり竹の水の柳　巴琴
おもしろさもいふをとけしらけさの霜　洗利
象の物のちやや九条北大坂川　菜薫
こちらこの京にたちよふ躑躅き　樗台
京ちらみのきつとみなの寒の月　素竹



## 春　諸国之部

制札し松の霞それ山ざくら　東武 秋瓜
梅さくや淀く川にちらし琴　かゞ金城 如本
春の手や源氏の物がたり　琳涼
春風に鶯の声藤の垣　五叢
永日哉羊の僧やおほあさ　後川
請ヶ寄にゐのいくや吉野川　かゞ小松 是宙

花一本手引くのあやしさ　里流

花ちるは日影の代に遅さかな　琴松

祢ちん曾ゝ玉子ゝ赤飯ぬ烏ふる　和州 古山

暮もこ人とや見ぬ目の雲の菊　耳栄

朽葉こ如何の花のあたりかな　葉夕

山吹の雲も更ぬしてさくらかな　名古屋 路十

夢梅子ゑ花ぬちら香かな　去角

春雨し前の菊香の名残と　ひさ 芳計



春の化花蝶や落の花　咲呼

花とまたの黙ぬけし春乃草ぬ花　青坂 維古

こちとまとおもへさ雷須るの里　一睡

世とさつ手二三町も八日しぶの生　可人

きのよ声ふ世にかゝりや花の亭　竺山

蝶しくもぬけ智く春鳥ぬ　越中 蘭山 麻文

夏部

春ほつ鳥探ゑに寒の寺　名古屋 五条坊

宿一つ恋しくなけ孫ときけ　竹郎

并一条杉の行雲とせし杜宇　曽文

氷室守小家もかけさうぬくき哉　也有

淀の月八分北さく々手に視　善東

物ごと背蚊鳴ゐらしかんこ鳥　南紀 羅外

あんさ鳥影もみえぬ思ひ哉　瓢子

つけて稲妻注まぬとのそかんむ鳥　細言

竹の葉に耳の月も揺れやきし哉　蛇の巣 兎渡

継並に赤酒呑んで秋を来ぬ　竹為

昨日の生様忘れてあともなき哉　素首

拙人乃仕えるよしほとゝぎす　和水

数年く瀬田の毛や在と哉　梧生

折当枕露の戸はあらし郭公　睢山

起く乃寝てしめや蚊帳　東園

額下孫より床の行列や孫きし哉　秋石

麻ばたけ上るや星し蝉の声　武州川さき 乙中

華ちりて一松となる也時鳥　加ゝ小松 甫尹

子規鳴しの京の町の中　和友

花なきハさくらむかし杜宇　松井

暁の夢の京や郭公　松丈

有明の月も宿りほとゝぎす　桃季

花鳥を五月物ぞ郭公　松司

麦秋や種の広や時鳥　素竹

聲ふる松あるひも清浄　此景

子規鶴たちてこほふくる　卜林

ほとゝきす比あとさきうし山梅　子皐

夕ちめや人ふえ経島海の上　金沢 撫涼

三ヶ月も暮れて宿る杜鵑　巨井

今一聲ふり向る音也郭公　和州 去路

杜鵑取すて月や丸窓　六栫

早苗は田ぞせ山家の涼しき　楪角

帰るさ寸ぶおちて雪の割れ　東故

みし庵や枝も都の古畑に　　墨翁

起しする蓮に露あり杜若　　松坂　左凌

蕣は此月に声あり朝き哉　　芭人

秋人の世もとの原し夜の月　　千田　五葉

思ひ身は富士に逢ふ覚ら　　南紀　吉茶

声ふ遠さ清水の上や杜宇　　京　寛治

行路や行脚の月に杖と笠
秋の顔　　津　談文

秋風のおかしくともなし人一し　　加二　後川

人中我浮子よくもなき雨見ぬ　　小松庵　素塞

虹をほりけり時ましてる見哉　　松主　正以

名月や本樫の若の梢まけ　　既仙

芋此葉の露こ影やくそれ　　可川

出まり有りし月や研ぐ如き山　　和夕

扇まく生きし秋も後の月　　一左

名月や芸かへ人いふときけ　　風谷

哀やな此月ゆも松はちらぬ露　波睦

竹きりして見る名月もありと日の面　女　八重

名月や雲は嬋の上たり　江成

名月や仏の通ひ弥生山　什風

蓮の葉に家も浮かりけり　松坂　修古

月清く照る辺り人や露の玉　鳥仙

今宵月あきも見えぬ鏡山　之童

夜は又月のうら風の塚の露　海童

七夕や月松鳥は橋の暦　津　鳥乙

七夕の音も蓮の葉に松の露　梅笑

秋入ぬ蝶の羽音もおはらはら　素同

掃きけり今一夜七夕の秋　豊市　和谷

大相のさし合ひ葉露香　宇鐘

月に星ふりに風見えぬ月のかげ　南紀　二蝶

稲妻の雲しばしや初もみぢ　古斎

思ふこと世にしれぬ夜の空　名古屋　野虹

人聲のみ津にわかれし霧の中　八亀

名月や拂はぬ袖に露の花　米布

木末からやせてゆくや後の月　露里

雲ゆくハ真北名残の姿かな　菜谷

名月や塔の姿の松の影　李說

名月や薄の一本月もこゝがち　湖南 可風

ちゝまきゝ豆の気もうれし二見浦　和州 史列

冬之部

きらさやし白帆に志たる北の風　浪花 曽游

ころぶきれし十二ヶ月の大晦日　巨峰

咲し比見ゆる屏風や出像花　寸鳥

和多乃むまれ中よる鳥や松の影　老眉

踏込智恵一ッかしこし船の雪　馬明

誰像に孫まち無し似せん冬籠　魯醉

夜白四季混雜

行く蝶野をよこきりて小また哉　東武深川　惟素

唐土も水へ流さぬ小ちなお　苞子

切合て日影ちる素麺中哉　李北

兄弟に一つ躑躅や野の花　烏朴

水せんのちり打掛ひ白ちぎり　女　志おん

涼しさみよ聲も夜の十夜哉　宜雅

国守のよそに初しぐる雲哉　吟風

明けの夜を船へ満や川ちどり　西羊



かけてや気おお時鳥　津　坐秋

垂不神の霧に雨の雨　萎陂

打渡る形に梅の夜哉　民古

物好の窓も昔ながらに　樸習

名のみ残りけり
義上老人を悼
月花の宿ちぎり枯尾花　加之小松　山叩

鯉驚も松の杖や松の雪　斧友

春の雪や銀の條とつたふ哉　三軌

菜もなき日ハなかまかりけさの雪
風静

初雪や珍しき男海の人
女 詩言

温石をさらす縁や夜の雪
菊上

月あかき二月の影や影の雪
一笠

初雪や足あとひとつかしこ迄
竹玉

竹のふし朱につかくもなけさの雪
行画

やく米あら夕けくれや松の雪
雨雀

さくら花空をさきたて時雨哉
麦水

百姓のまゝ戸をさゝる寒さかな
宜角

切くさの切まきてける時雨哉
高貴

初雪や都一とく墨染り
其好

ちるものゝ跡をつゝみまるまれ れんなり
是誉

清めれと雲もいつ寒かれ
猪史

氷の条りふりかへ古き落葉ハ
禹月

初雪やまつしかねちらへ升掃も
坊有

梅よりもて俳諧もた雲の吃
布六

雪の松や、雨に焚火のもとあり　蓮河

さゝ咲の石に操させてちらくちり　大口 市秋

梅白くさく日は雪のとけぬ哉　洛 雛良

川そともさそ石操させの手なる心　山口

蝿出や弁るのむしつふやきぬ　麦張

春野らく文かゝみとものる雪気　越後高田 松菜

月ほとまつるとも如月の宵　備前 文水

雪わけや春ま日の影とつゝ見る哉り　和州 麦湖

初雪の浦の路の出るとむら　仙壺

小春にもかくれ月七ふ鳴きの影　竹兜

松もはなきえてさし掛つる雪の庭　奇笛

擁きやうき仙人も来り山さくら　津 雨蘋

門おの姿の夜窓や一むら　茶筆

東武 秋瓜

着ものゝ花のいつちとみまの雪　左右

墨ゑ雪ふかへ霜かりけり　至芳

羽頭の雛まてひかりちて候て
二階を以附ある八一文仙　飛来

糸からりしられて日も梅　柳之

越しさ傳あるりさたゝ葉　象山

各詠

秋扇

咲花は人よりさきし山さくら　都路

あの森やさらし日のそれけり山さくら　柳之

けさり跡の水ありて山多山椿　左右

定家も銭山ともきこゆさくら江　飛来

清く又の峰みするちより山さくら　桃雪

雲またひともろくりやさんなか

折人は来て花むしたり手迄梅　東洲

梢より香て氣の清く流くの代　至芳

魂の日や反古もなきに涙かな　宗無

かへつて恥さらし[illegible]の面やの[illegible]　百存

亡父の旧友

[illegible]

花のさくまへいそうき二月哉　見龍

家のまはり所や山さくら　曽北

保とゝきす

京に一夜しの月の穴　麦林

鶏きくく過へて生駒杜宇　南利

月

供連ぬ大名見ゆるしとめて　芦本

名月やきゝはぬ日比新法度　季説

雪

出替り居ならす月や宮あらの宮丸　涼免

打越て生駒は志てや升主の雪　百川

淡乃宮川橋にて恵古能時ハ十年
人の鬼奉達て源乃弓せるにて出羽乃ま
旬ハ年まて面おとにて精女千世人の柳
其汁似せ似書志てし其似時ハ十年
人まさきてつと寄せハ十年人の様
其乃人と柳の門おし人あてたあときし
まき星津見きるハにて弥数あつし
きとまれある何乃人伊勢乃能時年ものおのま

乃あつめしきひろひ原ゑ家々今は
あつめしきひろひ集といゝ仙覚を例とせは
加茂重秀飛鳥井の例を猶もあらく
本朝撰集の例はあつめしきひろひを此
集の撰とは申しぬ

南部某誌

國學院大學 短大 図書 第6391号 受入 昭36.3.14

書林

いせ山田一志
藤原長兵衛

京寺町二条上
井筒屋庄兵衛